

藤壺の「醒めぬ夢」

山崎, 和子

(出版者 / Publisher)

法政大学国文学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

日本文学誌要 / 日本文学誌要

(巻 / Volume)

72

(開始ページ / Start Page)

14

(終了ページ / End Page)

24

(発行年 / Year)

2005-07

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00010097>

藤壺の「醒めぬ夢」

山崎 和子

はじめに

源氏物語若紫巻において、源氏と藤壺が二度目の逢瀬の際二人の間で交わされたのが次の歌である。二度目とするについては、藤壺の「宮もあさましかりしを思し出づるだに、世ととも御もの思ひなるを、さてだにやみなむと深う思したるに」(若紫①231)から、既に一度逢っていると読み取れることによる。

何ごとをかは聞こえつくしたまはむ、くらぶの山に宿も
とらまほしげなれど、あやにくなる短夜にて、あさましう
なかなかなり。

源氏 見てもまたあふよまれなる夢の中にやがてまぎる
るわが身ともがな

とむせかへりたまふさまも、さすがにいみじければ、

藤壺 世がたりになや伝へんたくひなくうき身を醒めぬ
夢になしても

思し乱れたるさまも、いとことわりにかたじけなし。(若
紫①231～232)

両者は「夢」の語をキーワードにお互いの思いを詠んでいるが、源氏の言う「夢」と藤壺の用いた「夢」の語は、同じく「夢」と詠みながら、重ね合わせることでできない二人の心と存在の乖離を象徴する、異なる「夢」を描いていたのではないかと思う。従来にも、この贈答歌の異質性に留意した小町谷照彦氏は『源氏物語の歌ことば表現』(東京大学出版会1984年8月)において、次のように述べておられる。

…この「夢」に対する姿勢は両者においてかなりへだたりがある。光源氏にとって、「夢」は現実の困難な状況を一

藤壺の「醒めぬ夢」

切忘却させる場であり、「夢」に没入し、甘美に耽溺すること、「まれなる」逢瀬の永続を期待したのである。…これに対して、藤壺は光源氏のような楽天性は持ち得ない。出発点にあるのは「憂き身」である。「憂き身」は弱者である女の自意識と言えよう。「憂き身」は所詮「夢」の中に浸り切ることができない。……この贈答は両者の愛情に対する取り組み方の相異をかなり明確に浮き彫りしているように思われる。(124-125頁)

また、当該歌は『伊勢物語』六十九段における伊勢斎宮の禁忌の恋の歌と関連して論じられることが多く、鈴木日出男氏も『伊勢物語』との関連を踏まえた上で、

源氏の言う「くらぶの山」としての「夢」も、藤壺の言う「醒めぬ夢」も、時間を超えた永遠性を志向している。…

…源氏の言う「夢」はあくまでも不確かな観念そのものであり、愛の永遠への憧れというのに近い。……これは(筆者注・藤壺歌「醒め」ざるをえない「夢」だとして、源氏の言い分に反発的に応じているのである。

と捉えておられる。贈答歌において、同じ語を詠みながら内容を転化する手法は常套的であるし、男女の贈答歌に固有の、女の側からの「切り返し」があるのも、鈴木氏の説かれる通りであろう。しかし、従来の把握からは、二人の「夢」の内実の相違、特に藤壺の「醒めぬ夢」の語で形象化しようとしたものが、今少し明確でないように思われる。「醒めぬ夢」の語は、源氏物語にも平安和歌にも他に例を見ない表現である。本稿では源氏物語と平安朝の和歌における「夢」の用法を考察し、藤壺が

「醒めぬ夢になす」と表現した意識の内実に迫ってみたい。

一 源氏物語の「夢」

本来、「寢目」或は「齋ミ・齋ム」を語源とする(注3)と捉えられる「夢」は、

睡眠中に、いろいろな物事を現実のことにように見たり聞いたり感じたりする現象。多くは視覚的性質をもち、覚醒時の刺激の残存や身体内部の感覚的刺激に影響されて起こるもの。(『日本国語大辞典』小学館1976年)

と説明され、平安朝以後は比喩表現としての用法も生じた(注4)。まず、源氏物語における「夢」140例(「御夢」4例を含む)を検討していきたい。

- 1 かの有明の君は、はかなかりし夢を思し出でて、いともの嘆かしうながめたまふ。(花宴①88)
 - 2 五壇の御修法のはじめにてつつしみおはします隙をうかがひて、例の夢のやうに聞こえたまふ。(賢木②105)
- 例1は、朧月夜の君が源氏との弘徽殿の細殿での逢瀬を「はかなかりし夢」と捉え、2は、朧月夜が内侍として出仕後も源氏と逢瀬を重ねていることを「例の夢のやうに聞こえ」と叙述する。これらは、男女の逢瀬そのものを「夢」と捉え、逢瀬を「まるで夢のようだ」「夢のような気持ちがある」と比喩的に表現する例である。即ち、「夢」が情交を暗示(『新全集』)すると把握される「夢」である。

- 3 「ありし世はみな夢に見なして、今なむさめてはかなきに

やと思ひたまへ定めがたくはべるに、労などは静かにや
定めきこえさすべうはべらむ」(朝顔②⁴⁴²³)

4 源氏むつごとを語りあはせむ人もがうき世の夢もなか
ばさむやと

明石明けぬ夜にやがてまどへる心にはいづれを夢とわき
て語らむ(明石②⁵²¹)

5 誰も誰も、ことわりの別れにてたぐひあることも思さ
れず、めづらかにいみじく、明けぐれの夢にまどひたま
ふほど、さらなりや。(御法④⁵⁰⁶)

6 夕霧いつとかはおどろかすべき明けぬ夜の夢さめてとか言
ひしひとこと(夕霧④⁴⁵⁴)

7 「よろしうおこたりたまふさまにうけたまはりしかば、
思たまへたゆみたりしほどに。夢も醒むるほどはべなる
を、いとあさましうなむ」(夕霧④⁴⁵⁴)

例3は、父式部卿宮の死により斎院を退下した朝顔の姫君を
訪ねた源氏が、姫君への長年の恋情を訴えたのに対し、姫君は、
過去の「ありし世」は「夢」と捉えることによって、寝て見る
「夢」も定めなき現世も同じくはかないことを述べている。当
該は、一条天皇崩御に際し「ありし世は夢に見なして涙さへ
まらぬ宿ぞかなしかりける」(栄花物語・いはかげ、続古今集
卷一六哀傷歌1401)初句「ありし世を」と詠んだ紫式部歌と
類似する表現である。4は、須磨から明石に居を移した源氏が
明石の君に求婚し、明石の君はそれを拒否するという、男女の
贈答歌における男の求愛、女の切り返しを常套的に詠んだもの
である。源氏歌では「うき世」に生きることを「夢」と捉え、

返す明石の君歌は、「うき世の夢」を受け、それと寝て見る
「夢」はいずれが「夢」であるのか判別できないと言う。これ
らははかないこの世を「夢」と捉えるのである。

5の「明けぐれの夢にまどふ」は、紫の上が「消えゆく露の
心地」^(注5)して夜明けとともに「消え果て」る臨終場面を叙す。上
野英子氏は、「明けぐれの夢」は紫の上の死の暗喩であるとし
た上で、「あけぐれ」は時間を設定するのみならず、「朝とも夜
ともつかぬへ曖昧さ」や朝とも夜ともいえる「両義性」を内
包する含蓄的表現であるとされた。死を暗喩する表現には、柏
木の死を「かく夢のやうなること」(柏木④⁵³⁰)、八宮の死を
「思ひさまさん方なき夢」(椎本⑤⁵¹²)、大君の死を「この近
き夢」(宿木⑤⁵³⁵)と語る例もある。

次に6は、柏木の死後夕霧の度重なる弔問に対し、落葉宮が
「今は、かくあさましき夢の世を、すこしも思ひさますをりあら
ばなん、絶えぬ御とぶらひも、聞こえやるべき」(夕霧④⁴⁵⁴)
と答えさせた、その言葉を踏まえた贈答である。落葉宮は柏木
の死という現実に行き着くことを「あさましき夢」と捉えたので
あり、夕霧の言う「明けぬ夜の夢」も、無明長夜の闇に惑う落
葉宮が見る「夢」も、つまりは現実における柏木の死を指して
いる。信じがたい・信じたくない出来事である人の死は「夢」
と捉えられ、「さめ」た「うつつ」と対比的に認識されるので
ある。7も柏木の弔問に訪れた夕霧が、寝て見る「夢」は覚め
る時があるのに、柏木の死という現実^(注6)は覚めることがないと、
落葉宮に語る例である。ここでは、睡眠時の「夢」は覚めるが、
たとえ「夢」と思われようが、現実の死は「覚めることがない」

藤壺の「醒めぬ夢」

という認識で対比されている。このように「夢」の認識には「うつつ」が深く関わっていると考えられる。

更に、霊夢として源氏物語の展開を唱導する「夢」などの用法もある。

8 「去ぬる朔日の夢に、さまことなる物の告げ知らずることとはべりしかば、信じがたきことと思うたまへしかど……」

(明石② 231)

9 だいたいささかまどろむともなき夢に、この手馴らしし猫のいとらうたげにうちなきて来たるを……(若菜下④ 236)

8の明石入道が見た「さまことなる物の告げ知らずる」夢は、同じ頃源氏の見た「夢の中にも父帝の御教へあり」(明石② 233)と照応し、源氏は明石へといざなわれていく。「告げ知らずる」「御教へ」と語られるように、このような夢は人々に告知や先導をする働きがあり、不可解な夢は夢解きによってその意味を解き明かす必要があった。9は、長年想いを募らせていた女三宮と関係結んだ柏木が、少しまどろむともない夢に愛猫を見たもので、それは女三宮の懐妊を予知する夢であった。これらは、古代的な「夢」の特性である神の託宣や告夢・霊夢の系譜にある。「そもそも夢は異界との回路^{注6}」であり、死者や物の怪によって発せられる「他界からの信号^{注7}」であると捉えられるなど、亡くなった人の夢や、夢見によって人身の災いを察知する夢などもここに含められる。

源氏物語に語られた「夢」は、本来の睡眠中に見る「夢」を言う場合と、比喩表現がある。比喩表現では、現実の「うつつ」

とは思えない・思いたくないことやあまりに「はかなし」と捉えられることを、喜びや苦悩・悲哀などの感情を通して「夢」または比況の「夢のやう」「夢の心地す」などと表現する。即ち、これらを場面として分類すると次のようになる。

イ 恋情によって睡眠中に恋しい人の「夢」を見ることや、男女の逢瀬を「夢」「夢のやう」などと表現する。

ロ 人の死や環境に触発され、この世や身をはかないものと捉え、はかなさの喩として表現する。「死」そのものも「夢」と捉える。

ハ 古代的な神託としての「夢」を揺曳し、託宣や霊夢・告夢として作用し、亡くなった人の夢など、不可思議な「夢」を表現する。

ニ 今一つはイ・ハに属さない、単純に睡眠中に見る「夢」を言う例や、喩えとして「夢を結ぶ」「夢を見る」がゆつくり眠ることを表す例がある。

右の検討において、「夢」は「うつつ」と深く関係して認識されているのであったが、源氏物語では「夢うつつ」が並列的に語られる例は1例しかなく、「夢」と「うつつ」そのものを対にして語る例も少ない。「うつつ」19例は、地の文において「うつつともおぼえず」(7例)「うつつの心地したまはず」(2例)「うつつならず」(1例)と、「うつつ」を否定する表現が半数を占める。同じく信じがたい現実を認識する際、「夢」と捉えるのか、「夢のやう」「夢の心地す」と比喩表現で捉えるのか、或は「うつつ」と思えないと捉えるのかは、立脚する場や認識の度合いなどにより違いがある。「夢」「うつつ」例を和歌

と散文に分類すると次表のようになる（数字は用例数）。

	夢	御夢	夢のやう	夢の心地す	夢か	夢うつつ	うつつ
散文	72	4	25	23	2	1	19
和歌	12	0	0	0	1	0	0

また、「夢」の場面別の比率については、イ恋情に関しては15%、口死や人生観に関して37%、ハ託宣などに関して36%、ニ睡眠時の夢などに関して11%と、ロ・ハ例が多い。和歌12首のみにしてもロの例が6首を占める。これは源氏物語の特徴かとも思われるが、平安和歌の特徴としては『万葉集』の相聞歌の流れを受け、恋の歌に「夢」が詠まれることが多い。次に和歌について検討してみたい。

二 古今集など和歌の「夢」

まず『古今集』に「夢」を詠む歌は、春歌下1首、物名1首、恋歌26首、哀傷歌3首、雑歌3首、計34首がある。

10 寝ぬる夜の夢をはかなみまどろめばいやはかなにもなり

まざるかな（巻一二恋歌三644）

11 思ひつつ寝ればや人の見えつらむ夢と知りせばさめざら

ましを（巻一二恋歌一552）

12 命にもまさりて惜しくあるものは見果てぬ夢のさむるな

りけり（巻一二恋歌二609）

13 寝ても見ゆ寝でも見えけりおほかたはうつせみの世ぞ夢

にはありける（巻一六哀傷歌883）

14 夢とこそいふべかりけれ世の中にうつつあるものと思ひ

けるかな（巻一六哀傷歌884）

15 世の中は夢かうつつかうつつとも夢とも知らずありてな

ければ（巻一八雑歌下953）

例10・12は部立が「恋歌」である。そこでは恋人との逢瀬を「夢」と捉えて「はかな」く思い、恋しい人を見た夢が覚めることを「さめざらまし」「命にもまさりて惜し」と詠んでいる。『万葉集』や平安和歌において人々は恋しい人の夢を見ることを恋愛成就の頼みとしており、現実では逢えなくてもせめて夢の中で逢いたいと願っていた。それ故、はかない夢ではあっても夢が「さむ」ことへの痛惜の思いを見ることができると。一方、13・15「哀傷歌」「雑歌」における「夢」は、人の死や人生に触発され「うつせみの世」「世の中」をはかない「夢」と捉え、「うつつ」との対比において「夢」と嘆いたのである。

『古今集』の「哀傷歌」について菊川恵三氏は、「はかなきものとして現世と夢を同一視する表現が、死を対象にした哀傷歌の中で誕生する」「この『うつつと夢』はうつつ優位から夢優位へ、両者の断絶から融合まで、王朝の和歌世界でさまざまにうたわれ、歌表現の新たな地平をひらいていく」として、『古今集』において哀傷歌という新たな「夢」の表現世界が創出され、以後発展していったことを述べておられる。人の死に触れ「夢」を詠むことは、『万葉集』においても挽歌に亡き人を恋い夢に見ると歌うことはあったが、それは相聞歌と同じく睡眠時に見る「夢」であった。それ故「夢」は、平安朝において比喩

藤壺の「醒めぬ夢」

表現として表現世界を拡大したと考えられるが、右の用例を、
 仮に歌の部立に即して「恋歌」へ「哀傷歌」へ「雑歌」と分類するな
 らば、「恋歌」と「哀傷歌」へ「雑歌」に二分することができ
 る。そして源氏物語では、『古今集』において創出された「哀傷歌」
 の世界や「雑歌」に属する例が多く用いられている。
 次に『後撰集』『拾遺集』、私家集などについても検討してみ
 たい。

- 16 うつつにもあらぬ心は夢なれや見てもはかなきものを思
 へば（後撰集巻一二恋四 876）
 17 見る夢のうつつになるは世の常ぞうつつの夢になるぞか
 なしき（拾遺集巻一四恋四 920）
 18 夢とこそいふべかりけれ世の中はうつつあるものと思ひ
 けるかな（拾遺集巻二〇哀傷 1318）
 19 さくらばな散りなむのちは見も果てずさめぬる夢のこころ
 こそせめ（躬恒集 288）
 20 忘れず恋しきものは春の夜の夢の残りやさむるなりけり
 （貫之集 641）
 21 仮の世を背き果てにしはかひもなき人はうつつか夢かえこ
 そさだめね（斎宮女御集 280）
 22 あふことはあらぬに明くるしのめも見果てぬ夢の心地
 こそすれ（保憲女集 165）
 23 あさましきことは夢かとおどろけどうつつはさめぬものに
 ぞありける（保憲女集 203）
 24 程もなくけふはかばねと成りにけりあはれはかなき夢の
 世なりや（嘉言集 100）

25 うつつにて思へば言はむ方もなし今宵のことを夢になさ

ばや（和泉式部集 417）

26 うつつにて夢ばかりなるあふ事をうつつばかりの夢にな

さばや（和泉式部集 285）

例 16・17 の部立は「恋」、18 は「哀傷」である。他の歌も、
 20・22・26 は「恋歌」に、19・21・23・24・25 は「哀傷歌」
 へ「雑歌」に分類されるであろう。19・20・22 では『古今集』と
 同じく、見果てることなく「さめた夢」を哀惜し、25・26 の和
 泉式部歌は、つらい出来事を現実として直視するのではなく、
 夢にしてしまいたい、或いは自分が夢の中に逃避してしまいた
 いという願望を詠んでいる。『保憲女集』例 22 は第二句「あか
 ぬ」とするものもある。23 では、「夢」は覚めるが、「うつつ」
 である現実はいかに「あさましきこと」であろうと「さめぬ」
 ものだと捉え、「覚める夢」と「覚めないうつつ」を対比する
 認識が見られる。24 は、いく程の間もなく死は訪れることを
 知った今、人生とははかないものだと思付いた感慨から、この
 「世」を「はかなき夢」と捉えている。このように和歌におい
 ては、「夢」「うつつ」が表裏一体のものとして詠まれている。
 こうしたはかない「世」を「夢」と同一に見る認識には、唯
 摩経や金剛般若経における「是身如夢」「虚妄見」「一切有為
 法如夢泡影」などからの思想的影響があったことを述べ
 る論考もある。確かに「公任集」には「唯摩経十のたとひ」
 を歌にした 10 首が並び、「此身夢のごとし」を詞書とする歌は
 「常ならぬこの身は夢の同じくは憂からぬことを見るよしもが
 な」（294）と、無常の「現身」＝「夢」と詠んでいる。平安

朝の人々にとって、「夢」が〈恋歌〉ばかりではなく、はかない「世」や「身」をなぞらえる表現として広く浸透していったことがうかがえる。

三 源氏の「夢」と藤壺の「醒めぬ夢」

前章の考察から、和歌では「夢」は多く〈恋歌〉と〈哀傷歌〉〈雑歌〉の二系統において詠まれていることが明らかになった。私はこのことから冒頭にあげた源氏と藤壺歌の「夢」について、二人の重ね合わせることのできない心中と存在の乖離を象徴する表現として読み解こうと思うのである。その際、源氏歌が〈恋歌〉に属することの把握は容易であると思うが、藤壺歌が〈哀傷歌〉〈雑歌〉に属することについては説明を要するであろう。

『新大系』は当該歌を次のように現代語訳している。

（源氏） お逢いしてもまた逢う夜はめったにない夢の中に、
そのままにまざれいり消えるわたしの身であつては
しいよ。

（藤壺） 世間の語り草として人が伝えることであろうか、世
に類のなくつらいこの身をそのまま覚めぬ夢のなか
のものとするとしても。

そして、「藤壺の返しは世間の目への恐れを前面に立てつつも、歌の贈答を成立させることによって深くも源氏の無謀な恋情を受け入れている」と注し、前述の鈴木日出男氏も、結局は「男の激情的な訴えを包みこむような心のいたわりさえも含ま

れていよう」と捉えられるのであるが、藤壺歌はするように解釈されるものだろうか。

源氏の言う「くらぶの山」「くらぶ山」は、平安和歌では「やみ」「明けぬ」「くら（比）ぶ」などに掛かる歌枕であるが、その場所は「鞍馬山の古名とも、近江国（滋賀県）甲賀郡蔵部の地ともいわれる」（『新全集』）ように不明とされる。「くらぶの山」は明けることのない暗闇の世界である故に、そこに宿をとれば夜が明けることなく、いつまでも「夢」のような逢瀬を続け、「夢」を見続けることができる。ところが現実には初夏の「あやにくなる短夜」であり、夜は明け「夢」も覚めざるを得ない。それはまさに源氏が藤壺との逢瀬を「現とはおぼえぬ」（①若紫^二）と捉えたことと照応して、「夢」が覚めてしまえば「うつつ」に戻らざるを得ない。それ故に源氏は「夢の中」に紛れ込み、見果てることのない夢に甘美な追慕の情を抱いたのである。それは逢瀬を「夢」と捉え、小野小町が「夢と知りせばさめざらましを」と詠んだ〈恋歌〉の世界である。

一方藤壺は、「たぐひなくうき身」を自ら「醒めぬ夢になす」ことを想定するが、「醒めぬ夢」表現は『新編国歌大観CD-ROM版』（角川書店）を検索するに他に例がない。「夢」が「さむ」「さめぬ（完了）」「さめはてぬ（打消）」「さめざらまし」は和歌にも源氏物語にも見られるし、和歌では「見果てぬ夢」「見も果てずさめぬる夢」の表現もある。それ故「醒めぬ夢」は少し特異な表現ということになるが、源氏の言う「夢の中に（やがて）まざる身」と呼応し、藤壺もわが身を「覚めることのない夢の中に閉じ込めたとしても」と読めなくもない。

藤壺の「醒めぬ夢」

しかしここで、次のような歌に注目したい。

27 うき身世にやがて消えなば尋ねても草の原をば問はじと

や思ふ（花宴① 357）

28 柏木 起きてゆく空も知られぬあけぐれにいづくの露のかかる袖なり

女三宮 あけぐれの空にうき身は消えなむ夢なりけりと見てもやむべく（若菜下④ 228 - 229）

例27は、朧月夜の君が弘徽殿の細殿で源氏と逢った際、別れ際に源氏が「なほ名のりしたまへ。…かうてやみなむとは、さりととも思されじ」（花宴① 357）と言ったことへの切り返しの歌である。そこでは「うき身世にやがて消えなば」と「うき身」「消ゆ」をキーワードに、私がこのままこの世から消えたならばと、死を意味する歌を詠んでいる。「草の原」は「死後の魂のありか、墓」（「新大系」）の意である。

特に28は、藤壺と源氏の禁忌の恋が変奏された柏木物語における贈答歌である。柏木は女三宮と関係を結んだ後、「ただいささかまどろむともなき夢」（若菜下④ 226）に愛猫を見、「あはれなる夢語も聞こえさすべきを」（同④ 228）と語ったが、実際には「夢」の内容は語られず、女三宮歌はその「夢語」の語と右例の柏木歌を踏まえて詠まれたものである。女三宮の言う「夢」は男女の逢瀬を捉え、それが「夢なりけりと見てもやむべく」とは、「あれは夢だったのだ」と思うことによつて現実の「うつつ」を葬り去ろうとする表現である。つまり、上句と下句は倒置され、「（あなたとの逢瀬は、現実とは思えない）夢だったのだと思うことで当然すべてが終わるように、私の憂き

身は明け方の空に消えてしまいたい」と願う意である。女三宮にとつて柏木との逢瀬は「夢」として終わるものだという認識自体は藤壺の場合と大きく異なるが、今一つ留意すべきは、上句の「うき身は消えなむ」にある。やはり「うき身」は柏木と通じた拙い運命のわが「うき身」であり、「あけぐれの空に」「消え」ることは、柏木歌の「あけぐれ」「露」の語と照応しながら、露となつてこの世から消滅する、死を意味している。

当時朧月夜の君は、東宮への入内が確実視されていたにも拘わらず、源氏と契りを交わし、女三宮は源氏の正妻であつた。両者は婚姻関係による逢瀬ではなく、女三宮においては密通であり、合意なき交りである。その女君がともに情交の後、わが「うき身」が「消ゆ」ことを歌に詠んでいる。これが一つの歌の型であり、物語の話型であるとしても、夫婦関係ではない男女の情交の後、女君がわが身は不運なものと観じてこの世から消えたいと、死を意識した歌を詠む点に注目できる。次のような例もある。

29 数ならぬ伏屋に生ふる名のうさにあるにもあらず消ゆる帯木（帚木① 112）

30 降りみだれみきはにこほる雪よりも中空にてぞわれは消ぬべき（浮舟⑥ 154）

31 なげきわび身をば棄つとも亡き影にうき名流さむことをこそ思へ（浮舟⑥ 193）

例29は、空蟬が逢瀬直後ではないが帚木巻末において、わが身の「名のうさ」故に「消ゆ」と詠み、30の浮舟も匂宮と通じたわが身が雪よりもはかく空中で消えてしまふだろうと詠じ

ている。同じく31も、浮舟が匂宮との恋愛沙汰を世間に対してみつともないことだと思い、どうしたらよいか困惑する嘆きから「身を棄つ」ことを思うのである。これらの女君も自分の「うき身」「名のうさ」故に「消ゆ」「棄つ」と、この世においてわが身が存在することを否定している。従って、これらの女君の思いと、藤壺が「たぐひなくうき身を醒めぬ夢になしても」と想定することは、ある種等質の表現であったのではないだろうか。しかし、いずれの女君も「うき身」は「消ゆ」「棄つ」と詠んでいるのに対し、藤壺だけはそうは詠まず「うき身」を「醒めぬ夢になす」と詠じた、その独自性・特異性にも留意しなければならないまい。

31は入水自殺を決意した浮舟が、たとえ自分が死んだとしても死後世間の「人笑へ」となり「うき名」を流すであろうことを憂慮する歌であるが、藤壺も源氏との関係が世間の「世がたり」になることをこの上なく恐れていた。源氏物語中7例ある「世がたり」は、「人に似ぬ・めづらか・めづらし・ありがたし」という、めつたにない希有さにおいて、世間の人々の噂にのぼり、語りぐさになることを言う。藤壺は帝妃であり、しかも継子との不実というあり得べからざる恋愛沙汰によって、「うつつ」の世の人々の好奇の対象となることを深く苦悩したのであった。

これらの点から、源氏と藤壺の歌が同じく「夢」の語を詠みながら両者の「夢」に大きな懸隔が感じられたことに一つの説明がつくであろう。源氏の「夢」は「恋歌」の「夢」であり、夢が「さめない」ことを希求する歌である。片や藤壺歌は、源

氏と禁忌の情を交わしてしまった不運なわが身がこの世に在ることを否定する歌である。当時、和歌の「哀傷歌へ雑歌」において、はかない「世」や「身」を「夢」となぞらえる認識があり、源氏物語でも「世」や「死」を「夢」と表現している。藤壺はそれらを基底にわが「うき身」を「夢になす」と表現した。しかもそれは「醒めぬ夢」と、覚醒することのない、「うつつ」の世に立ち返ることのできない、閉ざされた世界である。「見果てぬ夢」であれば、覚醒した「うつつ」の世界から覚めた夢を認識するものであるし、同時代の歌人泉式部が詠じたのも「夢になす」ことへの願望であった。ところが藤壺は、類例のない不運な身と観じたわが身を「醒めぬ夢」として永遠に夢の中に封じ込める、つまりは死によって、わが身、わが罪が世間の語りぐさとなることを避けたいと願ったのである。

従来も、本居宣長が「夢はさめて又本の現にかへる物なるを、夢になしてきゆる身は、かへる事なきをいふ也」(『源氏物語玉の小櫛』)と、この世から「消ゆ」ことと結びつけて捉えていた。これに対し、木船重昭氏は「さめて」こそ救われる「夢」が「さめぬ」ならば、それは「永久に消し去ることのできない悪夢と思うことにほかならない」と述べられた。確かに、突然匂宮が「添ひ臥す」という事態から解放された浮舟が、「恐ろしき夢のさめたる心地して、汗におし漬して臥したまへり」(東屋⑥㊟)例などにおいては「悪夢」の意であるが、当該の藤壺における「醒めぬ」ことは、「消し去ることができない」のではない。本来は覚める「夢」が「覚めない」ことによって、永遠に覚めることのない「夢」の世界に自らを封じ込める、こ

藤壺の「醒めぬ夢」

の世の生を拒否することであつたと思う。

おわりに

藤壺歌の「醒めぬ夢」の語は、源氏歌の「夢」の語と響きあいながらも、平安和歌にも例のない表現であり、源氏物語においても当該のみという、特異な「夢」であつた。当然その根底には、「うつつ」の「世」や「身」をはかない「夢」と捉える『古今集』以来の認識があり、源氏物語においても、寝て見る「夢」は覚めるものであるし、「うき世の夢」も「明けぬ夜の夢」も所詮は「さむ」ものであると捉えられている。ところが「死」だけはいかに「あけぐれの夢」「思ひさまさん方なき夢」など「夢」と捉えるとしても、覚めることのない現実であつた。「醒めぬ夢」は、そうした「覚める」「夢」を「覚めない」ものとして封印し、「うつつ」を否定する、むしろ「死」を内包する、覚醒なき「夢」の世界を創出したものであつたと思う。

鈴木日出男氏は前述の論考の中で、「源氏の言う『くらぶの山』としての『夢』も、藤壺の言う『醒めぬ夢』も、時間を超えた永遠性を志向している」と述べておられるが、二人の志向した「永遠性」すら異なるものであつたと言えよう。源氏は〈恋歌〉の発想において甘美な夢を追想し「愛の永遠」を志向したのに対し、藤壺は源氏と交わったわが身、わが罪を永遠の夢の中に封印するという、死を意味する「永遠性」であつた。突然の男君との情交に驚き、拒否するべき立場の女君が共に自分を「うき身」と捉え、この世から「消ゆ」ことを歌に詠むこ

とは、それが型であるとしても、藤壺例も本質的にそこから逸脱するものではないだろう。冒頭の若紫巻の源氏と藤壺の密会は二度目だと解されるが、一度目の叙述はなく、逢瀬後初めての贈答歌であることも、この解釈を妨げることはないだろうと思う。また「たぐひなくうき身」の「たぐひ」が『伊勢物語』の禁忌の恋の女君との比較にあるとしても、『伊勢物語』では寝て見る「夢」と覚めた「うつつ」との対比において、夢かうつかの判定を詠むものである。その「夢」は源氏歌と同じ〈恋歌〉に属する認識であり、ここで論じた藤壺の「醒めぬ夢」とは位相を異にすると考えられる。

かくて藤壺歌は、「世間の語りぐさとして人は伝えるのでしようか、他に同じ例のない私の不運な身を覚めることのない夢にし(て、永遠に夢の中に封印することで、私がこの世からいなくなり) ましても」と解釈できるだろう。

注1

『源氏物語』の用例は『小学館新編日本古典文学全集』によつた。『新全集』と略称。『岩波新日本古典文学大系』も『新大系』と略称。和歌は『新編国歌大観』(角川書店)によつたが、表記を改めたところがある。

2

『逢瀬の夢——『源氏物語』注解ノートから——』(成蹊園文)第37号2004年3月。『源氏物語虚構論』(東京大学出版会2003年2月)所収「天上の恋」では、「くらぶの山」「醒めぬ夢」に「仏教という無明長夜の闇、すなわち人間の救済されたい煩惱のイメージ」をも読み取ろうとされる。

- 3 「寝目」説は、西郷信綱『古代人と夢』（平凡社1972年5月53頁）菊川恵三「万葉の夢、古今の夢——俗信の夢のゆくえ——」（『上代文学』第92号2004年4月）、斎ミ・斎ム説には三苦浩輔『源氏物語の民俗学的研究』（桜楓社1980年6月）などがある。
- 4 鳥居和子「日本文学古典に於ける夢」（立教大学日本文学」第30号1973年6月）、江口孝夫『日本古典文学夢についての研究』（風間書房1987年2月）などに詳細な「夢」の分析もある。
- 5 「源氏物語に於ける「夢」の表徴——特に紫の上臨終時の「明けぐれの夢」をめぐる——」（『実践国文学』第25号1984年3月）
- 6 藤井由紀子『源氏物語』魂の系譜——「夢」と「物の怪」を視座として——」（『古代中世文学論考第一集』新典社1998年10月）
- 7 日向一雅『源氏物語の主題 「家」の遺志と宿世の物語の構造』121頁（桜楓社1983年5月）
- 8 菊川氏は注3に同じ。川本真貴『源氏物語』の夢と方法」（『同志社国文学』第13号1978年3月）などにも同様の指摘がある。
- 9 鹿内和子「和歌における夢について——万葉集く八代集——」（『女子大国文』第63号1971年10月）
- 10 注2に同じ。
- 11 不義の子を宿した藤壺と女三宮は出産によっても死ぬことを願っていた。また、紫の上・明石の君・六条御息所・末摘花などいわゆる正妻格・通い妻である女君は、「頼み・うらみ・おほつかな・さだめなし・うし・なげき

12

わぶ」などと詠むが、わが「うき身」が「消ゆ」と詠む歌は見られない。

「藤壺の宮像修復論——若紫の巻の一節の再審——」（『平安文学研究』第43輯1969年11月）

（やまざき かずこ・博士後期課程三年）